九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

パスカルの人間観II : 三つの秩序

上田, 富美子
九州大学医療技術短期大学部

https://doi.org/10.15017/112

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 7, pp.17-29, 1980-03-25. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

パスカルの人間観 II
— 三つの秩序 —

上田 富美子

Vue de l'homme de Pascal II
— Trois ordres —

Fumiko Ueda

私たちは，さきに，反省意識にもたらされる，人間の，「思考（精神）」の側と「身体（物体）」の側への繕いようのない矛盾分裂のすがたを見た。「思考」の側への徹底は，とりもなおさず，自らとは全く異質な，自らの力をもってはどうすることもできない対極的なものを，いよいよ明確なかたちで突きつけられる過程でもあった。（短大紀要第6号「パスカルの人間観」参照）ではパスカルは，このような人間の，人間であるがゆえの悲劇性の前に私たちを放置したままでいたのだろうか。多分そうではない。それは，パスカルが，その生涯の最後の閃光であがなった明るみでもあったろう。そこには，人間の至り得る究極のかたちがうつし出されているように思える。私たちはそこから，人間の問題についての，限りない示唆を得ることができるのではないだろうか。しかも私たちは，ここにおいて，今まで扱って来た数々の主題が，一つの大きな主題へと収束する可能性を与えられる。課されたものは余りに大きく，自らの非力を思い知らされざるを得ないが，この壮大にして重い主題に一歩なりとも接近をはかれればと考えている。

パスカルの人間観を考察する上で，見落すことのできない重要なものに「三つの秩序」（trois ordres）の問題があるように思える。それについて，パスカル自身は以下のように規定している。「あたかも，精神的な（spirituel）偉大さ（grandeur）はないかのようにして，肉的な（charnel）偉大さをしか嘆称し得ない人々がおり，知恵（sagesse）のうちに，さらに限りなく高い（haut）偉大さがないかのようにして，精神的な偉大さをしか嘆称し得ない人々もいる。

いかなる物体（corps）も，空も，星も，地も，その王国（royaume）も，精神（esprit）の最小のものにも値いしない。なぜなら，精神の最小のものは，それらすべてのもの，および自己（soi）を知る（connaître）が，物体は少しも知ることがないからである。あらゆる物体を合せても，あらゆる精神を合せても，それら精神のあらゆる所産（production）も，愛（charité）の最小の動き（mouvement）にも値いしない。愛はさらに限りなく（infiniment）高い秩序（ordre）のものである」（793[1]）さらに続けて「あらゆる物体（corps）を合せても，そこからわずかの思考（pensée）を生ぜしめることはできない。それは不可能なことであり，別の秩序（ordre）に属することである。いかなる物体，いかなる精神（esprit）を集めても，そこから，まことの愛（charité）の一つの動きをも取り出すことはできない。それは不可能なことであり，別の秩序に，超自然的（surnaturel）秩序に属することである」（793）

ここで，「物体」（corps），「精神」（esprit），「愛」（charité）の三つの「秩序」（ordre）が想定されており，これらは順次高次な上昇を示しながらも，截然と区別されることが示されている。その中でも「愛の秩序」が，他の二つの「秩序」ととりわけて明確に区別さ

九州大学医療技術短期大学部

れていることは，「無限に（infiniment）高い」とか「超自然的」（surnaturel）という形容によっても明らかであろう。この点はまず注意されなければならない。ただし，これらはいずれも人間の在り方にかかわるのであるから，「物体の秩序」は同時に「身（肉）体の秩序」と見なされて然るべきであろう。実際，「物体」も「身（肉）体」も原語では等しく≪corps≫であって区別されないし，上記のパスカル自身の言葉によっても，「肉的なもの」すなわち人間の身体性を介して，「星」や「土」などの「物体」へのつながりが保留されているように思えるからである。それで今後，この「秩序」に関しては，「物（身）体の秩序」という表現を与えることにしたい。

ところで，人間における「物（身）体」（corps）と，「精神」（esprit）ないし「思考」（pensée）という明確な区別は，いったい何に由来するのだろうか。人間は元来，心身両面を切り離せないかたちで保有し，それらはいずれもトータルな人間の中で合一されているのではないだろうか。この点については，さきの論文（短大紀要第6号「パスカルの人間観」）が有力な手がかりを与えてくれるように思える。そこで，私たちは，人間に固有な反省意識が，人間を「身体」の側と「精神（思考）」の側へと二分し，両者をつなぎようのない分裂の中へ置くのを見て来た。してみると，「物（身）体の秩序」と言い，「精神の秩序」と言うも，何らかの意味で反省知の介入を前提としていることが予想される。これらの「秩序」は，きわめて人間的な事態に発しているのである。さて，これらの「秩序」がそのようなものに基づいているとしても，では，これらが，「秩序」（ordre）という名にふさわしい，一つの閉じた系を形成することができるのは，どうしてであろうか。この点に関しても，さきの論文が見逃せないように思える。（短大紀要第6号「パスカルの人間観」16〜18頁参照）

すなわち，私たちは，そこで，「身体」と「精神」の両側面への分極化の事態とともに，このような分裂に耐えられない人間の本性が，いずれか一方の側にのみ就こうとする傾向を免れないのを見て来た。そしてパスカルは，古来よりの人間の思想が，究極において，相対立する二つの流れに大別できることの原因がそこにあることを見抜いていた。すなわち，そこには，いずれかの側だけを取り，それを核として生全体を構築しようとする人間のつよい意図がうかがわれ，その観念への反映が，一つの思想へと結実する経緯が見て取れる。こうして，いずれか一方の側を「原理」とすることによって形成された世界が，それぞれ，「物（身）体の秩序」，「精神の秩序」と名付けられているのではないだろうか。してみると，「秩序」の成立には，すでに人間の「意志」（volonté）が前提されていなければならないだろう。そこで，こうした事態を，「物（身）体の秩序」の場合を例にとって考察してみよう。

「意志（volonté）は，もろもろの面のうちある一つの面を一そう好み，自分の見ることを好まない面の諸性質を考えることから，精神（esprit）をそらせる。したがって，精神は意志と全く足をそろえて歩き，意志の好む面を見るために足をとめる。そんなふうにして，精神はその見るところのものに基づいて，その事物を判断する（juger）」(99)　ここでは，「意志」（volonté）がまず主導権を握り，「精神」（esprit）を従属し，その上で両者が協働するさまが指摘されている。すなわち，前述の部分を併せ考慮すれば，自己を何らかのかたちで把握している反省的な「思考（精神）」が先立するにしても，かかる反省知がもたらした両極のうち，いずれか一方を取る段階において「意志」こそが優越し，かえって「精神」を従属させる事態が明らかになる。では，そこで，「意志」が「身（物）体」の側を選ぶということは，どういうことなのであろうか。

「邪欲（concupiscence）と力（force）とが，我々のあらゆる行為（action）のもと（source）である。邪欲は意志による（volontaire）行為を，力は意志によらぬ（involontaire）行為をおこなう」(334)　すなわち，ここで，「意志」が「欲望」（désir）と結びつくことにより，

「邪欲」(concupiscence) として，人間のあらゆる意図的「行為」(action) の源泉となることが示されている。ところで，「欲望」は人間の「身体性」に依拠し，人を外へと，すなわち「物体」の方へとつなぐ力であると言うことができ，その意味で「欲望」は，人間の生存に不可欠な要件であると見なして差し支えないであろう。そこで人が「身(物)体」の側を選ぶということは，「意志」が「欲望」と結びつき，本来，自然的であるべき「欲望」を意図的なものに変えることであると推定できよう。「欲望」は自然の根を断たれ，「意志」と結合することによって，その歯止めをはずされ，限界のない放恣な奔出へと開かれることになる。この果て知らぬ貪欲のすがたこそ，人間的欲望(邪欲)にきわめて特徴的なことと言わなければなるまい。かくて，ここには，隅々まで「欲望」の原理に貫徹された，一つの閉じた世界が出現する。これこそが，パスカルのいわゆる「物(身)体の秩序」にほかならないであろう。そこでは，だから「精神」は，この「王国」(royaume)の忠実な奉仕者であるに過ぎない。それは讃美し，弁明し，装飾する付帯的役割しか担わされてはいないのである。[2)]

だがここでもう一度，この「秩序」の成立の契機を振り返るならば，それはあくまで，反省知ないし反省意識を前提としていることが留意されなければならない。「意志」は，反省意識があらわにした自己分裂を踏まえながら，一方の側を強引に取ろうとしたのであった。では，「意志」をして，このような強行策を取らしめた原因は何であろうか。それは，さきに見たように，人間がこうした事態に耐え得ないことによるであろう。すなわち「意志」は，このような事態への直面を避けようとして，一方の側にだけ就こうとしたのである。だから，この選択に先立って，そこには「意志」の，つよい自己欺瞞への企図がある。いやむしろ，自己欺瞞へのはからいこそが，異様な熱意をもって，「意志」を一方の側へと執着させる源泉となっていると言った方が適切でもあろう。この隠された原因こそ，その「秩序」をいよいよ閉じられたものとし，いよいよ堅固に保つ力となっていると言うことができる。その意味で，「物(身)体の秩序」に見られる，外へと向う自己欺瞞，すなわち「欲望」への果て知らぬ耽溺は，自己分裂の意識を押しやる恰好の手段であろう。なぜなら，自己を顧みたくないがゆえに，自己の外へと向うことは十分肯けるところだからである。かくて，こうした自己欺瞞への傾向は，欺瞞の理由となった前提を被覆し，「欲望」の全面的解放に手をかし，人をして「欲望」へのひたすらの専心に赴かせることになる。そして，こうした事態こそがはじめからのひそかなねがいであり，企図であったのであってみれば，「物(身)体」の側への選択は，まことに好ましい選択であったと言わなければならない。

では，「精神」の側への選択についてはどうであろうか。ここでは，上記の場合と逆に，「意志」が「物(身)体」を「精神」に従属させる構造が予想されるであろう。言い換えるならば，この場合，「精神」が「欲望」を完全に支配することによって，「精神の秩序」を成立せしめることが予測される。「精神の秩序」は，このような関係が維持されなくては構築されがたい。しかしそのことは，いつたい可能であるのだろうか。ところが，ここでも，欺瞞の動機が支配している点は，前の場合と何の変りもないにしても，反省意識という「精神」の一つの在り方があばき立てた事実を否定し，ごまかすために，同じく「精神」を利用するということは，いったいどういうことなのであろうか。だから，この場合には一そうの困難が予想される。「精神」は鋭意「欲望」を従属せしめ，あわよくば否定しようと努めるが，それはしょせん不可能なことであり，結局，自己欺瞞のための有力な手段である「欲望」をひそかに取り込むことになった。ここで，「欲望」の中でも，知的要素のつよい「名誉欲」(désir de gloire) や「虚栄」(vanité) が中心になり，しだいに「精神」をその王座から追い払い，自らその代役を務めるようになる。したがって，この「秩序」は，本質上「物(身)体の秩序」と何の相違ももたないことになり，「欲望」が表に出ないだけ，その偽

善性は一そう厭わしいと言うことができよう。パスカルは，この側に就いた人々の二重の欺瞞構造を鋭く見抜いていた。(短大紀要第6号「パスカルの人間観」17〜18頁参照) いずれにしても，「精神の秩序」においては，その自己完結性が保持されることは，きわめて困難であると言わなければならないであろう。

もちろん，パスカルは，「精神の秩序」について否定的評価を与えているだけではない。そのことはすでに，「物(身)体の秩序」に対して「精神の秩序」を上位に位置付け，かなり高い評価を与えていることによっても裏付けられる。(前記793章参照) しかしこのような観点は，「精神」が「物(身)体」を従えて，意図的に一つの系を構成する場合に向けてよりも，「物(身)体」から区別され，切り離されたかたちでの「精神」に向けて取られていることが察知されよう。視点は，何かを原理として形成される統合的「秩序」よりも，「原理」そのものへ置かれているのである。そのことは実際，「精神の秩序」が「物(身)体の秩序」よりも，一つの閉じた世界を形成することが困難であったこと自体に予見される。これは，「精神」がそれ自身として見られた場合，具体からの分離を前提とするという，人間に特有な傾向に由来するのでもあろう。

いずれにしても，「物(身)体の秩序」および「精神の秩序」において明らかなのは，欺瞞の構造であり，それは，自己意識を媒介とする人間存在の「身(物)体」と「精神」の側への分極化の事態をすでに前提とし，そのいずれかに強引に就くことによって自己分裂を免れようとした方途自身がもつ矛盾の構造でもあった。「物(身)体の秩序」においては，欺瞞が果てのない「欲望」への耽溺にすり替えられることによって，「欲望」の原理の専横を許し，その中で自己を見失わせることによって目的は達せられたかに見えた。パスカル自身，「物(身)体の秩序」と「精神の秩序」に関連して，「精神の最小のものは……自己(soi)を知るが，物体は少しも知ることがない」(793) と述べ，これらの人々について，「求めることもなく見出すこともなく生きる人々」(257)，「だらしなく，しまりなく死ぬことをしか考えない」(63) 人々，また「反省(réflexion)もなく，不安もなく，自分の好み(inclination)と楽しみ(plaisir)とに導かれるままになり，……ただこの一時(instant)においてのみ幸福であろうとしか考えない人々」(195) と表現しているのも，そのような意味においてであろう。しかしながら，いかに欺瞞の仕組は巧妙を極めていようとも，欺瞞は欺瞞である点で何の変りもあり得ない。そこに多大の努力が費されれば，費されるほど，むしろ虚しさは増大するであろう。いかに壮大な「王国」が築かれようとも，それは実体のない，空洞化された形骸に過ぎないであろう。このような自己欺瞞の究極の悲惨については，「慰戯」(divertissement) を論じたときに触れたところでもあった。(短大紀要第4号「パスカルの慰戯について」参照) すでに何らかのかたちで自己意識が前提とされている以上，本来的には，その前に明確に自ら置く以外に道はあり得ない。かくて，人はまたあらためて，避けようとした自己分裂の中に再び引き戻されることになる。

自己意識ないし反省意識がもたらした，この分極化についてはすでに触れたので，ここであらためて述べることをしないが，このような事態に直面する人は，当然のことながら，最早そこから目を背けようとしていないのであり，そこには，覚めた「精神」とともに歩む「意志」が前提されている。言い換えれば，そこでは，前には不明瞭で，意図的にぼかされていた自己意識が一そう明確にされ，その明確化は，「意志」に支えられてこそ可能であるということになろう。このような，「精神」とのみ協働する「意志」の在り方，換言すれば，何ものにも依拠しない「精神」と「意志」との協働自体こそ，自覚と呼ばれてよいものであろう。そこには，純粋な「自覚」しかなく，「精神」と「意志」とのよりつよく高められた形態しかあり得ない。そして，このような「精神」と「意志」との極度の緊張こそが，自己分裂の苦痛に辛うじて耐えることを可能にしている。これは断絶であり，

分裂であるかぎり，一つの「秩序」を形成することは決してあり得ない。むしろ，それは「秩序」の中断でしかない。そして，この地平に至ったとき人は，それぞれの中に置かれていた際には，大きな相違があると思いなしていた「物（身）体の秩序」と「精神の秩序」とが，いずれも欺瞞に由来することをいよいよ明確に突きつけられ，これらを等しなみに見なすようになるに違いない。だが，自覚の過程は分極化をいよいよ進め，つなぎようのない分裂の極限にまで人を追いつめる過程でもある。このような状況は，人間の本性の底から，熾烈な求めを喚び起さずにはいないだろう。人間に突きつけられた容赦のない自覚は，同時に，その引き裂かれた暗黒の淵からの，真の救出をひたすらに求め続けることでしかないのである。これらの人々こそ，まさに，パスカルが「呻きつつ求める」（421）と適切に表現した人々にほかならないであろう。それはむしろ，他人事でなく，パスカル自身にこそ，最も厳しく懸けられた問題であった。では，こうした，真正の，ひたすらの求めは，どんな展望を開くことができたのだろうか。

「心情（cœur）はそれ自らの秩序（ordre）をもっている。精神（esprit）もそれ自らの秩序をもってい，それは原理（principe）と証明（démonstration）とによるものである。心情はそれとは別のものをもっている。人は愛（amour）のかずかずの原因（cause）を秩序正しく述べて，人の愛せらるべきことを証明しはしない。もしするとしたら，笑うべきことであろう。

イエス・キリスト，聖パウロは愛（charité）の秩序をもっている。精神の秩序をもっているのではない。なぜなら，この人々は，あたため（échauffer）ようとのぞむ，教え（instruire）ようとのぞむのではない」（283）

すなわち，ここでは，「精神の秩序」に対し，第三の「秩序」として「愛（charité）の秩序」が想定されている。自己分裂を自覚したものが見通し得るのは，まさにこの「秩序」であろう。そして，「心情」（cœur）が，そこへとつなぐ重要な契機と見なされる。なぜなら，上のパスカルの言葉において，「心情」と「愛」（amour）との間係が，「愛（charité）の秩序」への伏線として置かれているからである。たしかに，等しく「愛」であっても，≪amour≫と≪charité≫との間の段落が象徴的に示すように，それぞれは位層を異にするものであろう。実際，冒頭に引用した793章においても，「愛（charité）の秩序」は，他の二つの「秩序」に対して，特に厳格な区別を置かれていることは前に指摘したところである。それは結局，この「秩序」が，究極において「神」（Dieu）に帰属せしめられるからにはかなるまい。そのことは，上記引用中，「愛の秩序」が，「イエス・キリスト」（Jésus - Christ），「聖パウロ」（saint Paul）と関連させられていることによっても，また，793章の冒頭に，つぎのように述べられていることによっても明らかである。「身体（corps）[3] から精神（esprit）への無限の距離は，精神から愛（charité）への限りなく限りない距離を表徴する（figurer）。なぜなら，愛は超自然的（surnaturel）なものであるから。

偉大なるもののもついかなる光輝（éclat）も，精神の探求にたずさわる人々の前には光を放たない。

精神的なる人々の偉大さ（grandeur）は，王にも富者にも主長にも，これら肉的に偉大なものたちには見えない。

神（Dieu）に属するものでなければ無に等しい知恵（sagesse）の偉大さは，肉的なる人々にも精神的なる人々にも見えない。これらは，種類の違った三つの秩序（ordre）である」（793） したがって，≪amour≫と≪charité≫は，厳密に区別されなければならないにしても，283章の対比的構造が示すように，≪amour≫は，まさに≪charité≫を「表徴する」（figurer）ものとして，≪charité≫に対し類比的関係に立つものであろう。そして，「心情」（coeur）と≪amour≫との密接なかかわりが示唆されているのであるから，「心情」こそが，私たちを≪charité≫につなぐ有力な方途であると見なされることになる。パスカル

は実際，「神（Dieu）を感ずる（sentir）のは心情（cœur）であって，理性（raison）ではない。これが信仰（foi）というものである。理性にでなく，心情に感じられる（sensible）神」（278）とも言っている。ところで，これらの言葉は，私たちをして，ただちにかの「心情」（cœur）と「理性」（raison）との，換言するならば「繊細の精神」（esprit de finesse）と「幾何学の精神」（esprit de géométrie）との区別の問題を想起せしめる。そこで，以前この主題のもとに論じたものの中から，特に「心情」ないし「繊細の精神」に焦点を当て，再確認を図っておく必要があろう。（短大紀要第3号「パスカルにおける繊細の精神」参照）

パスカルにおいて，「繊細の精神」（esprit de finesse）ないし「心情」（cœur）には，きわめて豊かな内容が委ねられていた。パスカルがこの精神こそ，「真に哲学する」（vraiment philosopher）ことに通ずると述べたとき（4章参照），彼がいかに多くのものを，この精神に托そうとしていたかがわかる。「幾何学の精神」（esprit de géométrie）ないし「理性」（raison）が主要な役割を演ずるところの，空虚な「論理」ではなく，生きた具体的内実こそが，彼の「思考」（pensée）の目指そうとしたところであった。そして，このような「思考」においてこそ，決定的役割を担うのが，「繊細の精神」ないし「心情」とされたのである。その意味で「パンセ」全篇はまさに，パスカル自身の「繊細の精神」の産物であったと言わなければならないだろう。編者の意図によるとはいえ，「繊細の精神」と「幾何学の精神」の問題が，「パンセ」巻頭に置かれたことは，きわめて象徴的なことであった。

「繊細の精神」において私たちが見たものは，具体的な個別的存在者（他者）の内面への深まりにおいて，そのままのかたちでそれを捉え，独自の客観性に至ろうとする精神の働きである。したがってこれは，対象への直接的関係であり，その意味で「感覚」（sens）とのかかわりを免れるものではないが，ここにいわゆる「感覚」は狭義のものではなく，「感情」をも含み込んだ，人間の対象への全面的対応を示唆している。ここに，人間（自己）と対象（他者）との全面的照応関係の領野が開かれる。パスカルの「繊細の精神」ないし「心情」は，究極において，このような領野を用意するものであったと言わなければならない。

以上が，前に論及した「繊細の精神」ないし「心情」についての，あらかたの素描であるが，ではこのような特性は，ここにいわゆる「心情」の場合にも，そのまま適合するのであろうか。この点が検討されなければならないだろう。それについては，パスカル自身の以下の言葉が一つの手がかりを与えてくれるように思える。「単純な（simple）な人々が推理する（raisonner）ことなく信ずる（croire）のを見ても，諸君は驚いてはならない。神（Dieu）はこの人々を愛し，自らを厭う心を与え，この人々の心情（cœur）を信仰へと傾か（incliner）しめたもうたのだ。もし神が心情を傾かしめたまわぬならば，有効なる信念をもって信ずることは決してしないであろう。神が心情を傾かしめたもうや否や，人は信ずるであろう」（284）これらの引用で注意されるべきは，「心情」に固有な特性として，「傾ける」（incliner）という表現が与えられている点であろう。それは，277章の「専念する」（s' adonner）という言葉にも即応する。これらの表現はいずれも，前述の人間の他者への全面的対応を予想するものであろう。しかも，前に挙げた278章では，「神を感ずる（sentir）のは心情である」，「理性でなく心情に感じられる（sensible）神」という言葉が見られ，ここには，前述の広い意味の「感覚」と「心情」との密接な関係が示唆されているように思える。このように見て来ると，以前に論じた問題とこの場合との緊密な関連は，当然のこととは言え，明白であると言わなければならないだろう。そして実際，自己のすべてを傾けて専心するこのような人間の姿こそ，「愛」の名に最もふさわしいものではないだろうか。これが，さきに挙げた283章で，「心情」が「愛」（amour）と同一視されていることの根拠であろう。そこで，おのずから，つぎの課題として

「心情」と「愛の秩序」との関係の問題が提起されることになろう。

パスカルが，まず，「心情」（cœur）を私たち人間の側に帰属するものと見なしていたことの証拠は，283章において，「心情」を地上の「愛」（amour）に即応するものと考えていた点に見て取ることができる。しかしながら一方，上記のように，「心情」の特性は，自己のすべてを傾けて他者に向うところに，言い換えるならば他者に専念するところにあった。このことはいったい，何を意味しているのであろうか。自己を傾け尽して他者に向うとは，最早，狭い自己の立場を捨てることであろう。これがすなわち，パスカルのいわゆる「自己を厭う」（haïr soi-même）（284,286など）という表現に相当する。そこで，自己は一たん空無になり，透明になり，それによって，他者をそのままのかたちで映すことができる。それはただちに，自己のすべてがそのまま，他者によって映し返されることを意味するであろう。これこそが，さきに述べた自己と他者との全面的照応関係であり，そこでは，彼我の区別が消滅する。したがって，「心情」は，まず以て人間の側の規定でありながら，他方，真に他者へとつなぐ有力な根拠を提供するものであると言うことができる。ところで「他者」とは何であろうか。それは「自己」以外の「物」であり「人」であり，そのほか一切のものであると言ってよいであろうが，究極的には，限りなく「自己」を超えたものに至り着くほかはあるまい。それをもし「神」（Dieu）と呼ぶならば，「心情」は結局，絶対的な「他者」である「神」を感受し得る唯一の人間的規定であると言って差し支えないであろう。ところで，このような「心情」に特徴的な自己と他者との照応関係は，彼我の区別が消されることによって，上記のような人間の側からの観点がそのまま，他者の側からのそれに逆転されることが可能である。そうすると，上のような照応関係は逆に，他者の側から，したがって結局「神」の側からもたらされたものと見なされることになる。パスカルが，「神が心情を傾かしめたもう」（284, 傍点筆者）という表現を取っているのは，その意味であろう。

こうして，「心情」は自己の側から出発しながら，他者自身を，究極には「神」を開示する。そして自己を虚しくして他者へ，最終的には「神」へ向うことが「愛」（amour）にほかならないとすれば，それはただちに他者の側，すなわち「神」の側からの呼応に，すなわち「慈愛」（charité）につながることを意味する。≪amour≫と≪charité≫はここに一つになる。このような，「心情」によって開かれた自己と他者すなわち「神」との照応の地平こそ，換言するならば，両者の「愛」の地平こそ，「愛の秩序」にほかならないであろう。そしてまた，このことが，「愛の秩序」を「神」に帰属せしめた原因でもあろう。かくて，「心情」は「愛の秩序」へと導く要因であるのみならず，その主要な内実を構成するものと言うことができる。さてここで，私たちはあらためて，すでに論及した「繊細の精神」がもつ深い意味に驚かされざるを得ない。その背後には，絶対者の無限の影が隠されていたのである。それは単に認識の問題にとどまらず，私たち人間の在り方の根元に触れる問題でもあったと言うことができるのではないだろうか。

ところで，以上のことは，私たちを，さきの自己分裂の事実へと突き返す。ここまで来て，それがどんな意味をもっていたのかが明確にされるように思えるからである。意識の明るみのもとに，ごまかしようもなくあらわにされた「身（物）体」と「精神」との分裂の悲劇は，人間の在り方の一つの限界を示していはしないだろうか。新たな，「心情」の立場は，そのような矛盾分裂の窮地に自らをおとしめた人間の在り方自身を問おうとしている。「心情」の場合，狭い自己の立場は捨てられ，空無にされていたが，ここでは逆に，その狭い自己の立場こそ，維持されているのではあるまいか。そして，このような立場のもつ決定的矛盾が，反省意識の場で容赦なく暴露されたのではないだろうか。この点について，パスカルのつぎの言葉は有力な手がかりを与えてくれるように思われる。

「自我（le *moi*）は厭うべきものである。ミ

トンよ，自我をおおってみるがよい。おおったからとて，取り除かれるわけではない。それゆえ，君はやはり厭うべきものである。－いいえ，決してそうではない。なぜなら，我々のしているようにすべての人に親切をおこなうならば，人はもう我々を嫌うわけがない。－それはそうだ。もし自我のうち我々の受けとる不快だけを厭うというのであるならば，それはほんとうである。しかし，もし，私が自我は不正（injuste）であるから，自我はあらゆるものの中心（centre）になるからという理由で，自我を厭うのであるならば，私はやはり自我を厭うことになろう。

要するに，自我は二つの特質をもっている。すなわち，それはそれ自身で（en soi）不正である。なぜなら，それはあらゆるものの中心になるから。またそれはほかの人々にとって不快である。なぜなら，それはその人々を服従せしめようとのぞむから。おもうに，おのおのの自我は敵であり，他のすべてのものに暴君として臨もうとする。君はそこから不快を取り除くという，がしかし不正を取り除くことはできない」（455） ここにいわゆる「自我」（le *moi*）こそが，狭義の自己に相当するものであろう。そして，すでにその立場を超えたパスカルには，「自我」が「それ自身で不正（injuste）である」とうつった。なぜなら，「自我」は「あらゆるものの中心（centre）になるから」である。パスカルの目は，「自我」の立場の本来的過誤を見据えている。

では，「自我」が自らをあらゆるものの中心とするというのは，どういうことなのであろうか。それは結局，主客関係において他者とかかわる人間の立場を示しているように思われる。そこではつねに自己が主体であり，他者は客体（対象）として自己の範疇に取り込まれる部分でだけ評価され，他は切り捨てられる。それはいかなる対象についても同様であり，この原理は終始変ることなく貫徹される。このように見て来ると，人間の在り方が自己分裂という破綻にもたらされたのは，その意味で自明の理であったと見なすことができよう。なぜなら，そこではすでに，自己でない他者を，自己のうちに組み込もうとする意図が先立しているのであるから。そして，このような前提自身が矛盾にほかならないのだから。「精神」と「身（物）体」との繕い得ぬ矛盾分裂の露呈は，反省意識にもたらされたこのような関係の反映であったと言うことができる。実際そこでは，その下敷として主客関係が存在し，「身（物）体」の側は「精神」によって完全に蔽い尽されない残滓として，「思考」の進展とともにいよいよあらわにされて来たのであった。「身（物）体」の側には，単なる異質性としての消極的意味しか与えられてはいない。（短大紀要第6号「パスカルの人間観」参照） ここに，さきに提起された疑問はその裏付けを得る。たしかにここでは，自己中心的「自我」に依存する人間の在り方自身が，その矛盾をあからさまに突きつけられることによって，その限界を問われているのである。

さて「自我」を中心とした立場は，上のような見方によると，主体へ，ひいては「精神」へとつながることになり，ここで「精神」自身が問題とされなければならないことになる。「精神」ないし「思考」は「偉大」（grandeur）とされ，無条件の絶対的評価が与えられて来た。（短大紀要第6号「パスカルの人間観」14頁参照） だがそれは，その時点での私たちにとっての無前提的枠組でしかなかったということではないだろうか。私たちは何の疑いもなく，その枠組を自明のこととして受け容れ，その中で動いて来たというだけのことであって，それが絶対的価値をもつかどうかということは別問題であろう。「心情」の立場は，そうした枠組自体を問うているのである。そこでは，だから，このものも相対に転落する。このように見て来ると，私たちはおのずから，以前に取り扱った「理性」（raison）の問題（短大紀要第5号「パスカルの賭けについて」）へと連れ戻されざるを得ない。すなわちそこでは，私たちが自明のものとして受け容れていた「理性」中心の世界自身が問われ，限界にもたらされることによって，私たちは，そうでない，未知の世界

の方への「賭け」(jeu)を迫られた。ここでの「理性」を広義に解すれば，それはそのまま，この場合に適合できるのではないだろうか。そこでは，人は「理性」の枠から一歩も出ることなく，自己充足的な閉じられた領域で自画自讃的行為を繰り返すほかはなかった。だとすると，自らを「偉大」とする評価も，まさにそれに相当し，真の客観性に値いするものではなかったと言わなければならないであろう。

してみると，ここにいわゆる「精神」ないし「理性」は，一般に考えられているほど無記的ではないことになる。それはただ不問に付された前提であったというだけのことであり，そこに施された抽象的濾化過程が無記的性格の見掛けを与えたに過ぎない。私たちはそこに，ひそかに取り込まれた，「自我」(le *moi*)をあらゆるものの中心にしようとする意図を見て取るであろう。「精神」は本来無記的ではあり得ず，「意志」(volonté)に先導されてはじめて機能するのである。無記的ということは，第二義的な意味しかもち得ない。このような事態こそ，パスカルをして，「精神(esprit)は意志(volonté)と全く足をそろえて歩き，意志の好む面を見るために足をとめる。そんなふうにして，精神はその見るところのものに基づいて，その事物を判断する」(99)と主張せしめたことの真の根拠であろう。この意図こそが「精神」を牛耳って，それとは気付かせぬままに，「精神」を自己中心的な方向へと統括してゆくのである。だから「精神」はおのずからこの枠内でしか機能しないし，また機能することによってその原理を貫徹するのである。では，すべての中心となる「自我」，この真に無前提的なものは何であろうか。これこそあらゆるものが淘汰されても，最終的に残される，人間の核心的部分を形成するものであろう。このような人間にとって極めて本来的なものが，ここで問われているのだとすれば，その困難性は，おのずから予測されようと言うものである。

さて，このように見て来ると，さきに「物(身)体の秩序」および「精神の秩序」として区別された二つの「秩序」は，大きく「自我」の立場の中に包括されることになろう。これらはせいぜい，「自我」の枠内での多少の相違という意味しかもたなくなるであろう。なぜなら，上のように見るかぎり，「物(身)体」へかかわる「欲望」(désir)ほど「自我」になじみやすいものはなく，おそらくその根は「自我」に深くつながっていると思えるからである。だからもちろん，ここにいわゆる「物(身)体」もそれ自身ではなく，すでに「欲望」に，したがって「自我」に先取りされ，その枠内に限定されたそれであることは言うまでもない。しかも，「精神」と「自我」との密接な関係は上記の通りである。すなわち「物(身)体」の側と言い「精神」の側と言うも，これらは同じ「自我」の領域内での一つの事態の捉え方の相違に過ぎない。そこには，「欲望」から「精神」へと貫通した一続きの構造があるだけである。その意味で，この構造が何らかのかたちで維持されている「物(身)体の秩序」は一応の成立を見るのに対し，「精神」の自立を前提とする「精神の秩序」は，「欲望」の浸透を受けて，その存立を危うくさせられたことはすでに見た通りである。それは，連続した一つの事態からして，当然の帰結であったと言うことができよう。

ところで，これらの「秩序」においては，欺瞞性によってはかされてはいるものの，自己分裂の事態を先取りし，それを避けようとして，いずれかの側に就こうとした意識の欺瞞が前提されていたが，このこともまさに，すべての中心にならすにはおかない「自我」の本性に根ざすことが，ここに明らかとなろう。なぜならさきに見たように，「自我」は主客関係に基づき，本来自らに同化できない「他の存在者」を埒内に取り込もうとし，その中に取り込まれた他者は，結局他者ではあり得ないという，矛盾の上に依拠するものだからである。それこそが，パスカルをして「自我はそれ自身不正である」(455)と言わしめた所以でもあろう。すなわち「自我」の立場は，それ自体で不正であり，欺瞞的なのである。「自我」の立場は，絶えざる欺瞞の再生産によって貫徹される。してみると，「物(身)体の秩序」および「精神の秩序」

こそ，まさにパスカルのいわゆる「自我」の立場を代表し，それに即応するものであると言うことができよう。

いずれにしても，「自我」の観点に立つかぎり，これら二つの「秩序」の区別は曖昧にされることは確かであって，そこにある一つの事態こそが最も肝要なこととなる。したがってパスカル自身，「三つの秩序」ではなく，「二つの秩序」を想定していたとも見られるふしがある。それは，さきに引用した283章で，そこには「精神の秩序」に対し「愛の秩序」が置かれているだけである。もっともそこで，「精神の秩序」は「自我」から切り離され，「原理」(principe) と「証明」(démonstration) をこととするものとして，抽象化を免れてはいないが，「自我」を前提とした広義の「精神」が，もしそこに容認されるならば，こうした「二つの秩序」の方が，事態に正確に添うことになろう。そして実際このことは，冒頭に掲げた「三つの秩序」についての規定においても，第一および第二の「秩序」に対し，第三の「秩序」だけが特に際立って区別されていた点に，早くも察知されるところでもある。

このように見て来ると，「自我」の立場の矛盾を明確に自覚する反省意識は，すでに，「自我」を脱していると言うことができるであろう。なぜなら，そこでは，自己欺瞞的態度は最早とられず，「自我」は正面から向き合われているからである。そして，欺瞞的でないことは，明らさまに自己分裂の事態に直面することであり，分裂の意識には，すでに「他者」への積極的評価の萌芽が見られるからである。自己中心的態度は破綻を示し，そこには，最早自己を中心になし得ないジレンマが露呈される。したがって，このさめた自覚的精神すなわち反省意識は，自ら意識しているよりも「自我」を離れ，「心情」のすぐ側まで来ていると言うことができるであろう。たとえまだ前途は暗く，そこへ至るには「賭け」(jeu) しか方法はあり得ないにしても。

さて，以上からして，「心情」において捨てられ空無にされるのは，人間に本来的な「自我」(le *moi*) であることがわかる。だがそこでは，「自己」が無になるのでないことは言うまでもない。「自我」だけが無になるのであり，そのような境位にこそ，「他者」が「自我」に先取りされない他者自身としてうつし出され，そのことによって逆に，真の自己自身が，「自我」の囚われを脱した自己自身が全面的にあらわになるのである。したがって人間は，「愛の秩序」に至ってはじめて完全に人間であることができる。しかもそのことは同時に，他者が他者そのものとして成立していることを前提にしている。これは，実に注目すべきことである。しかも「自我」の枠がはずされていることは，自己中心の意図が無にされていることであって，自己と他者との全面的照応関係は，決して「意志」に拠るものではない。完全な関係においては，「意志」が消されるのである。ここで私たちはあらためて，「意志」とは何かという問題の前に立たされる。これは多分，さきに見たように，「自我」と深く結びついているのでもあろう。しかしながら，それは今後の問題として残されるほかはない。そこには，おのずからなる関係があり，おのずからなる自立がある。自由と必然とは，そこにおいて一つである。それぞれが十全な存在者として完結しながら，しかも，それぞれが全面的に他者に向って開かれている。それぞれがそれ自身でありながら，そこには完全な調和がある。これこそ，人間の至り得る理想の世界ではないだろうか。それぞれの存在がそれぞれの喜びであり，知性や感情の分断のないこの充足した世界こそ。ここにおいて，すなわち「愛の秩序」において，人も物もそれ自身として十全に存在しながら，その意味を完全に開示することができると言えよう。

しかしながら，パスカルは無論，人間がその理想に至り着けるとは考えていなかった。彼は「自我」がどれほど人間に本来的で，どれほど克服しがたいものであるかを十分に承知していた。それは，「心情」についての彼の考え方自体にすでに示されているところでもある。つまり，「心情」における「自我」の放棄は，「傾ける」「専念する」などの言葉から予測されるように，私たち自身の側から言えば，絶えざる

課題なのである。私たちは文字通り自己のすべてを賭して刻々の努力をしなければ，この境位に近付くことはできない。だが，それこそが，上記のように，真に人間であるための唯一の方途であるかぎり，人間であることが，自己の限界への挑戦を含むいかに厳しい道であるかが知られよう。人間が人間であるためには，絶えず自らを超え出なければならない。この人間に課せられた永遠の課題は，人間が人間で在るのではなく，人間にならなければならない存在であることを示している。しかもこのような人間の歩みは，「他者」からの呼応に支えられてこそ可能であった。このことは言うまでもなく，人間の力の限界を超えている。それは，向う側から与えられるものなのであるから。そこにパスカルは，「神」を見ないではいられなかった。人間の力の限界の果ては「神」によってこそ，また「神」によってのみ埋められるのである。ここに，「心情」の「信仰」との密接な関連が浮びあがる。パスカルが自らの生の苦闘の果てにあがなった，この究極の人間観は，私たちをして，ついに「信仰」の前に立たしめる。これは，今後の大きな課題であろう。

以上，私たちは，「三つの秩序」を通じて，パスカルの人間についての見解を考察して来たのであるが，先立つ二つの「秩序」は，結局のところ，第三の「秩序」すなわち「愛の秩序」へと収束する予備段階をなすものであったと言うことができるであろう。しかしながら，単にそれだけにとどまらず，それ自体としても多くのことを含んでいたように思えるので，ここで今まで述べて来たことを振り返り，まとめを与えるとともに，何か新たな発見を得ることができればと思う。

「物（身）体の秩序」および「精神の秩序」は，反省意識が開示する，人間の，「身（物）体」の側と「精神」の側への分極の事態を先取りし，その事態を忌避することの上に，したがって自己欺瞞の上に成立している。すなわち，「物（身）体の秩序」は，その忌避から「身（物）体」の側にのみ就こうとした結果であり，「精神の秩序」は「精神」の側にのみ就こうとした結果である。欺瞞の「意志」が先導し，「欲望」と結びつき，「精神」を従属して一つの閉じた世界を形成し，「欲望」の「王国」を出現せしめたものが「物（身）体の秩序」であり，また同様にして，「意志」が「精神」のもとに「物（身）体」を従属せしめようとしたものが「精神の秩序」であると言える。しかしながら，ここでは，「精神」の「精神」による欺瞞という矛盾がおのずから破綻を示し，「精神」の自立を危うくし，ひそかに「欲望」の主導を許して，その「秩序」の確立は果されない。このような自己欺瞞的意図が排され，反省意識のもとに自己が明確に自覚されたとき，そこにはさきの分裂の構造があらわになるであろう。ところで，この，人間を「身（物）体」の側と「精神」の側への分裂という矛盾に追いやったものは，すべてのものの中心となる，人間に本来的な「自我」であると考えられる。主客関係によって，それ自身「自己」とは別な存在者である「他者」を自己の中に取り込もうとする「自我」の在り方自体のもつ矛盾が，反省意識に反映されたものと見なされる。そして，ここまで来て振り返ると，「物（身）体の秩序」も「精神の秩序」も「自我」の立場に包括され，その内部での欺瞞の構造の多少の差異に帰せしめられる。しかも欺瞞は，主客関係のもつ矛盾に依拠する「自我」には本来的であるからして，これら二つの「秩序」こそ「自我」の立場そのものを示していると見てよいであろう。したがって，最早自らを欺こうとせず，「自我」と向き合う反省意識は，その自己分裂の自覚によって，すでに自己中心的な「自我」の立場を脱し，新たな境位へと向けられている。そして，それこそが「心情」の境位であった。そこでは「自我」にかわり，「心情」が主導的役割を演ずる。「心情」においては，自己のすべてを傾けて他者へ向うことで，自己と他者との全面的照応関係が成立する。そこでは，「自我」の立場が捨てられることによって，自己も他者も，「自我」に先取されないそれ自身として開示される。ここにおいてこそ，人は真に人として，物は真に物として在ることができるであろう。しかも，

それぞれが十全なかたちで存在しながら，相互に全面的に開かれている。このような世界こそ「愛の秩序」と呼ばれるものであろう。そして，この「秩序」における他者の開示は，究極に「神」を想定せざるを得ず，人間が真に人間であるための条件は，ついに「信仰」の問題への展望を開くに至るのである。だが，人間に本来的な「自我」の放棄が容易に果されるものでないかぎり，「愛の秩序」における「心情」を中心とした，このような在り方は，絶えざる課題として私たちに課せられ，無限の努力を要請し続けることになろう。

以上がここでの論述のあらかたの素描であるが，こうした人間の究極の問題への接近は，他にいくつかの重要な問題を提起した。一つは「精神」とともに歩む「意志」の問題であり，他は「精神」ないし「理性」の問題である。それらについては，「自我」が，その解明の鍵をにぎるものであることが示唆された。「意志」は「自我」に依存する「物（身）体」および「精神」の「秩序」において，閉じた糸を形成することによって，そのような人間の在り方をますます強固にし，人をその完全な捕囚としているのではないか。また，私たちは「自我」にとらわれ，それを前提とした「精神」の状態を自明のこととし，絶対化しているのではないか。そして，すべての論述を通して透けて見えたのは意識の上昇の構造でもあった。すなわち，意識の欺瞞は明確な意識へ，自覚へともたらされ，さらに意識さえ消える充足の状況へ至り，それはそのまま，「自我」を中心とした「秩序」から，その「秩序」の破綻，新たな「秩序」としての「愛の秩序」への移行を下書きする。このように見ると，さきの問題も，この意識の上昇過程がおのずからあばき出したものであり，上昇の究極から逆に光を当てられることによって，はじめて真の解明にもたらされることが予測される。

こうして，私たちは，この究極の主題のもとに，「物（身）体」と「精神」の「秩序」のみならず，ありとあらゆる人間的主題が統括され，そのところを得て，壮大なシンフォニーを奏ではじめる予感をおぼえる。この多様にして秩序ある万華鏡のような世界こそ，パスカルの人間への徹底した洞察がもたらした最後の稔りでもあるのだろう。だが私たちは，それを望見するにとどめて，今はただ引きさがらざるを得ない。苦しみあえぐ上昇は，やがて，至福にみちた下降へと私たちをいざなうであろう。そこへ一縷の希望を托し，ひとまずここで考察を終ることにしたい。

パスカルが人間の追究を通して究極に至り得た「愛の秩序」の問題は，私たちに実に多くのものをもたらしてくれるように思える。なぜなら，今日ほど「自我」の立場が限界にまで追いつめられ，詰問にさらされている状況はないように見えるからである。「科学」の名で，あるいは「人類愛」の名でエゴは，その目的を究極まで完遂せずにはおかないように思われる。個人は，団体は，国家は，世界は，エゴの袋小路の中で出口を模索しながらも，盲いにされたまま，虚しいあがきを余儀なくされている。そのとき，自明の前提こそ問われねばならないとしたパスカルの態度は，無限の重みをもって私たちに突きつけられてくるのではないだろうか。そして，その果てに開かれる，いかなる存在者も歪曲されることなく，それ自身として存立することを容認される世界こそ，私たちのあくなき渇望の対象であるに違いない。かすかながら，私たちが処々にその曙光の予感をおぼえていることも，また確かである。そのとき，自らの全生涯を賭して，その境域に至り得た先達を見ることは，はかり知れない励ましではないだろうか。私たちに課されているものは，余りに大きく重い。しかしながら，そうであればあるほど，むしろ私たちは生きてゆけるに違いない。かのパスカルと同じように。

〔註〕

1) 番号はブランシュヴィク版の断章番号を示す。

2) 「精神」（esprit），なかんづく，その究極のかたちたる「理性」（raison）の「弱さ」については，「笑うべき理性！一吹きの

風にあやつられる，しかもどんな方向にでも」（82），「理性はどの方向にもたわむ」(274)などの表現に示されているが，パスカルによれば，「推理」（raisonnement）能力たる「理性」の論理性，形式性，普遍妥当性こそが，その弱さの根源と見なされていたと考えられる。普遍妥当的ということは，あらゆる「対象」に適合されるということであり，そのことは逆に，対象の側から操作される危険をつねにもつからである。「どこにでも在り得る」ということは，「どこかに在る」という確固たる点に遂に至り得ない。パスカルは，その点を鋭く見抜いていたと思われる。

3) ここでは，≪corps≫は当然「身体」と読まれねばならないところから，第一の「秩序」を「物（身）体の秩序」とすることの裏付けが，ここにも得られるであろう。